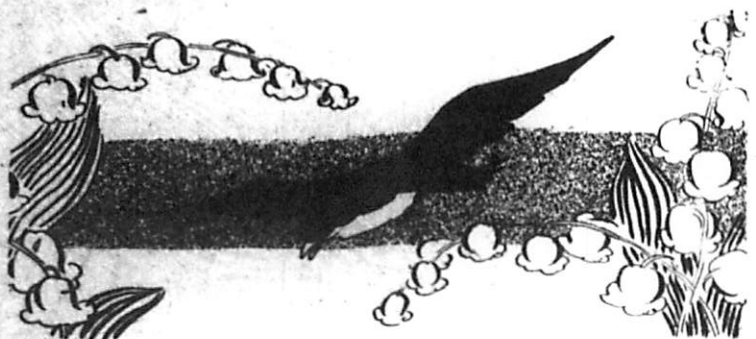


家庭 青い鳥の巢

永代美智子



除幕式の老軍人

何か人の爲めになることを爲たい……と、少女たちは相談して、「青い鳥の巢」といふ俱樂部を作りました。「青い鳥」は幸福を意味するのです。人の爲め、自分のために、少女たちはどんな幸福を見つけてせう？

目の前に戦争の記念日が近づきました。その日には遠方の市から老兵を招待して、丁度この町に建つた記念碑の除幕式を行なふことになつてきました。青い鳥の巢——少女俱樂部の會員は、俱樂部が出来て初めての新しい仕事を此の日に爲ようと思ひ立ちました。

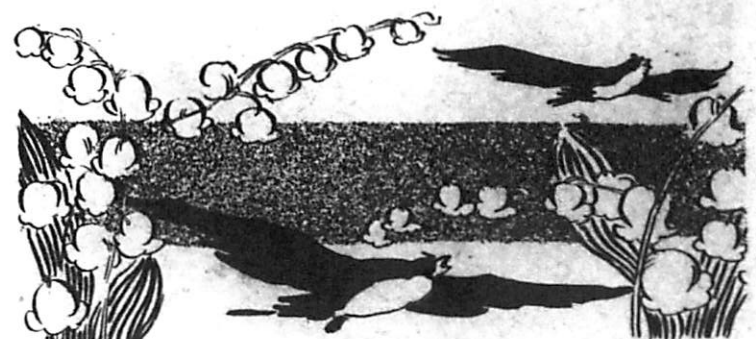
お父さんたちは自動車を借附したり、スタジオンへお客様を運へに行つたりする。お母さんたちの婦人俱樂部は大きな天幕の中で、お歌をまたちに奏し上げるお舞臺を飾る。

少年義勇兵は、老兵の連れてくるお孫さんたちを護りて泣かないやうに遊ばせることに役割が決まりました。さうして少女俱樂部は、お客様の御案内や、レモネードを差し上げる方へ廻りました。

十時着の特別列車で老兵たちは此の町へ着きました。旗と幕と天幕と花とで飾られた式場はお客様で一杯になりました。日光と、音楽と、軍服と、御さん達の購者とでみんなの心は浮き立ちました。式の始まる十一時にも近づけ間は有りません。

俱樂部の少女たちは本當に青い鳥のやうに大變よく働きました。その中でも、エーとアンとは、何度も自動車でお家から式場へ、コッパだの木鼠だのナブキんだのを運びました。

「アンさん、次の汽車でお客があるかも知れ



ないからスタジオンへ行つて見ませうか」

思つた通り、次の列車が着くと、たつた一人の老兵がプラットフォームへ降りて、どちらへ行つたら好いものか、案内人がるないものですか、困つた顔をしていました。

「あなた、除幕式にいらつしたのでせう？」

アンは有りつたけの元氣を出して聞ひかけました。何故と云つて、この老兵は顔中眞白なお髯を生じて、竹の杖を突いて、服が少し顔をしてるたからです。ナニ？ 除幕式？ おれは知らん！ とでも怒鳴られてこらんない、おつかないやありませんか。が、老兵は顔にも假合はぬやさしい聲で、

「さうですよ、特別列車に乗り遅れたもんだから、一回のる處は何處でせうかね？」と訊きました。

「まあ、お氣の毒でした。ちや今すぐ御案内しますから——私たちは「青い鳥の巢」の會員ですから」

「青い鳥の巢？」

と老兵は不思議さうに聞き返しました。

「え、青い鳥——幸福の鳥——少女俱樂部の名前なのです」

「エーは部長さんに頼んで式場へ電燈をかけて貰ひました。すぐ自動車を一臺こすやうに、そしてこの老兵の着くまで式を始めないやうに、どうです、本當に立派な事を爲したものでありませんか」

老兵はすぐ少女と仲好になりました。自動車が出来て式場へ行き着くまでに俱樂部のことや、會員の人数や、名前などを詳しく聞きました。

この老兵こそ、今日の一等大切なお客だつたのです。誰もがみんな此の人を大事にして、みんなでわい／＼大騒ぎするのです。が老兵は勧められる正席を辭退して、エーとアンとの間に坐りました。お舞臺の時にもさうでした。だから少女は、この老兵が式の時に立ち上つて、戦争に就ての立派な演説を爲した時には、自然にお鼻が高くなりました。少女は停車場までこの老兵を見送りました。念お別れと云ふ時に、老兵は、

「今度は私の家へおいで、屹度だよ」

驚いたことは、この老兵は少女俱樂部の會員を獲らず招待したいといふ手紙を、それから二週間目にアンとも、エーとお母さんへ寄越したのです。みんな大喜びで出かけ



ました。ステーションへ着くとすぐ何某かの
自動車で少女俱樂部へ案内されました。それが
ら立派なお庭へ連れられて、豪華も車子掛も

ナブキンもお皿もみんな青
い鳥」の模様のついたお部屋
でアイスクリームの御馳走に
なりました。

この老兵は非常に偉い人で
陸軍の少将でした。で「青い
鳥」の人たちは其場で會話を
して、この老少將を、少女俱
楽部の名譽員に推薦いたし
ました。

花賣の少年

モッジーはこの三四週間
毎火曜日の午後に出のお警者
へ通つてました。今日もそ
の日なので、自動車に乗つて
出かけました。

何時も母さまが買つておや
りになる花賣の少年が今日も
街の角に立つてました。肩
から懸けた大きな籠に薔薇の
花を山のやうに盛つてましたが、モッジー
一を見るに帽子を脱いでお辭儀しました。そ
の邊境に横から来た大きな馬車が花籠に突き

當る、あつと云ふ間に花賣の少年は倒れて、
ピンク色の薔薇の花のなかに埋つてしまひま
した。

モッジーは大急ぎで自動車を止めさせて
其處へ駆け付けました。肝心の馬車は遠くへ
走せ去りましたが、親切な紳士や婦人がたが
少年を助け起しました。少年は泣き出さう
でした。だつてまだ、辛と尤も位なものですも
のね。

モッジーは運轉手に手傳はせて落ち散つ
た花を拾ひ集め、傍の紳士に、
「あなた、お花を召しませんか？」
と美しい一輪を差し出しました。この輪
氣な振舞ひに感じた紳士は、
「お、美しい嬢ちゃんの手から美しい
花を買ひませう」

さう云つて五十圓銀貨を渡しました。通り
がよりの紳士も、貴婦人も、みんな五十圓づ
つ出して花を買ひました。見る／＼花は賣れ
て了つて、澤山の銀貨が少年の手に渡されま
した。

「あ、こんなに澤山！ 母ちゃんが喜ぶだらう
！ こんなに澤山！」
花賣の少年は澤山一杯の五十圓銀貨を見て

病院へ掛書

少女俱樂部の次の仕事は、毎週水曜日の午
後から會員のルイスさんのお家へ集まつて一
枚の美しい掛書を作ることでした。

白い四角な布に、鳥や歌や、お伽噺の繪を
刺繍して、それを大きく縫合せて、出来上つ
たのを町の子供病院に寄附しようといふので
した。繪の下圖は日曜日に市から此の町
へ遊びに来るボツア小父さんが描いて下さい
ました。それを赤だの、緑だの、黄色だの色
色な糸で刺繍するのです。中にも美事なの
は、青い鳥が飛んでゐる繪で、これはすつた
り青糸で刺繍されました。

この四角な布の間々を真赤な布で區切つて
一つに大きく縫ひ上つた時には、びつくりす
るほど立派な掛書圖に見えました。さうして、
これを病院へ届ける役には、ベツキーとモッ
ジーとが選ばれました。二少女が病院長に
出會つて、寄附の理由を話して、掛書圖を鑑

けて見せますと、病院長さんは、目を丸く
して、
「まあ立派ですこと！ 何て立派でせう！」
と心から喜んで、今一度それを鑑んで、
「これは是非あなた方から子供達に與つて頂き
ませう。さあ此方へ被さるい」

「少女は大きな部屋へ案内されました。此
室は、もう追々病氣も快くなつて、やがて退
院できる子供ばかりの病室でした。八つばか
り小さな寢床があつて、窓には花籠があり、
日光は明るく射し入つて、子供たちの頬にも
活々とした色が見えるのでした。

「さア皆さん、この二少女が、あなた方にお
土産を持つていらしたのですよ。ベツキ
ーさん、私がこれを掲げますからあなたお
話をして下さい」

で、ベツキーは一足前に進んで、「青い鳥」の
少女達がどんなにみんなの病氣を心配してゐ
るか、それを慰めるためにどうしてこの掛
書圖を縫つたかといふ筋道を、真摯な顔をし
ながら演説しました。子供たちは手を拍つて
喝采しました。この演説の間中、院長さんは
掛書圖を掲げて、みんなによく見えるやうに
立つてました。

「嬉しいでせう皆さん。ではね、この親切の
籠つた掛書圖を、交る／＼明日退院する人
の寢床に掲げるとしませう。テレツキさん
あなたは明日退院なさるのね。では明日ま
でこれをあなたのベッドに掛けませう。他
の皆さんも見てお楽しみなさい」

テレツキはこの町外れに母さんと二人
住んでゐる伊太利生れの少女で、この病院に
はもう一月も入つてました。急快くなつて
明日退院といふ今日、思ひがけ無く美しい
掛書圖をかけて貰つたので、嬉しさに、可
愛いマン圓い眼をくる／＼させてました。
小さな患者たちの心からの感謝を捧つて、
やがて二少女は、青い鳥の巢へ歸りました。

松葉糖の賣上

暑中休暇に、ベツキーのお家へ、すつと遠
くの田舎からメイといふ少女が来てしまし
た。メイは氣質の優しい少女なので、青
い鳥の巢」の少女たちともお友達になりまし
た。そのメイが、ある日ベツキーに、
「此の町には長い松葉の松の木は有りませ
んのね」

と訊きました。

ど真面目になりました。が、ボツア小父さんが、気がなげな歌をうたひ出したもので、みんなも歌を唱ひながら、それ／＼家路に着きました。その歌の聲々は長く美しく夜の町にひびきました。

小鳥は備らく

翌日は土曜日でした。會員は午後から新らしく自分たちの巢になった會館へ集まつて、まづ第一にボツア小父さんへの美事なお禮状を認め、會員一同の名前を書き列ねました。後で、その御返事が参りました。私は長く長くこの御禮状を大事にしてるませう。お老人になつて眼鏡を二つもかけねば字が讀めなくなる迄も大事に藏つて置きますよと、御返事には屬めてありました。

この新しい會館——青い鳥の巢を、どう役立てれば一層好いか、會員の相談會には、お父さんやお母さんたちも出席して、色々意見を借して下さりました。

相談の結果、椅子をせし買入れて、少年義勇團や、婦人俱樂部や、そのほかの集會に部屋を貸す。さうして出来た部屋代が百圓になれば、赤十字社へ寄附しよう、と云ふことになりました。

いよいよ式が始まると、演説があり、合唱があり、音楽と餘興とでみんなの氣持は浮き立ちました。

丁度集會の一人が演説をしてゐる最中でした。突然みんなは呼吸のつまるほど驚かせられました——火事の鐘が鳴り出したのです——この町のどこかに火事が生じた。誰かのお家が焼けてゐる——

さう思ふと誰もちつとはしてゐられませんでした。第一に大人が戸外へ飛び出しました。少年義勇團の連中も我選じと馳出しました。少女俱樂部の會員たちも一緒に行度かつたのですが、それでは巢が空っぽになるので、一同残つてお留守をすることになりました。會館の二階の窓を開けて見ると、町外れの空に方つて黒赤な煙が空を焦してゐるのが、物凄く眺められました。そのお家は、いまだに焼け落ちたのでせう。どつと火の柱が空高く立つて、大勢の叫び聲がはつきり手に取る

とに決りました。

そこへ、耳寄りな申込がありました。それは、町の教育會が家事料理裁縫の講習會を開くの、好い會場が無く困つてゐるから、是非少女會館の一部を貸してもらひ度い。もし借りられれば、お臺所と食堂と部屋と窓間とに道具を備へつけて、その道具を後で寄附するほかに、一ヶ月四十圓づつ借賃を出すといふのでした。

こんな結構な申出を誰が何と反對できませうと殊に少女會員自身も、家事や、料理や、お縫のお稽古を爲なくてはならないんです。そのお稽古を自分たちの會館で爲る——こんな好いことが又とあるでせうか。

が、會員たちは直ぐ「よろしい」と云ひませんでした。その代り早速ボツア小父さんに手紙を出して、「これ／＼の申込があります。承知して差支ないでせうか」と試いてやりました。御返事は折返してありました。

「大賛成です。あなた方に差しあげた家ですから、これからは御遠慮なく、いよやうにあつかりませう。しかし、新築開きのお祝ひには、ぜひ小父さんも招んで下さいな」講習會へは、お臺所と、二つの部屋と、二

階の寢室を一間とだけ貸すことになりました。あとにはまだ集會用の大廣間と、二階に三間の寢室とが残つてゐます。講習會へは一ヶ月間の約束で貸したので、一年経てば家中を少女俱樂部の好に使へるのです。

會員は毎日この楽しい會館に集まりました。松葉福を作つたり、細工物を作つたり、遊んで代りにお仕事をして、その製作品を賣りました。このお金で開館式の御馳走を買はうといふのでした。

十一月末の謝恩祭の前の夜に盛んな開館式を行ふことに決りますと、會員たちはもうその準備で夢中になつて了ひました。

母鳥がてきた

待ちに待つた開館式の當夜となりました。今夜の正客は、申すまでもなく、この立派な、大きな會館を少女俱樂部に寄附したボツア小父さんであらねばなりません。

小父さんは、わざわざ市から招かれて来ました。會員たちみんなの父母、兄弟姉妹、それからお買物婦のブランシェ、牧師のキース、ス、教育會の役人たち、先生たちも、一人残らずお客様になつて、日の暮るのを待ち度

やうに聞こえました。『まアどうしませう?』

「誰のお家でせう?」



空気を揺つて響き返りました。ベツギが暖房室へ駆けつけました。

電話はボツア小父さんから懸つてきたのでした。

「あなたベツギさん、火事はチレツクさんのお家でしたよ、さうしてね、今しがた煙が焼け落ちて了つたのです。ええ、ええ、まるで全焼なんです。チレツクさんはお母さんと二人で、兎に角、チレツクさんのお家へ避難させましたかね、チレツクさんのお家にも二人を泊める部屋が無いのですからね——どうでせう?」

「青い鳥の巢」の皆さんに何か親切な好いお考へは無いものでせうか?」

「まア私、どうしませう! 本當にチレツクさん、お氣の毒ですわ、鳥渡お待ち下さい私、みんなに相談してみますから」

「ボツギーはわな／＼震へながら、みんなの居る部屋へ駆け込んで、ボツア小父さんの言葉を傳へ、どうすれば可いかを相談いたしました。」

「お二人を此館へ招びませう、さうして泊めてあげませうよ。ボツア小父さんに、早くお二人を連れて来て頂くやうに申しませうよ」アンがさう云ひますと、みんな心から賛成をしました。

そこで、テレツサさんと、お母さんとは、すぐ會館へ呼ばれました。「青い鳥の巣」は本當の親鳥を見つけた譯です。なぜと云つて、テレツサのお母さんは、會館を大切にして、會員の面倒を見て下さつたからです。

「青い鳥の巣」には、赤十字社へ寄附するお金が大分溜つてゐたのです——その一部を、會員たちは、自分の巢へ来た不仕合せな親鳥と子鳥との爲めに、喜んで費ふことにしました。二階の寝室の間には立派な家具が買ひ込まれ、楽しい日光はいつも其處から部屋中へ射し込み、美しい花は絶えず窓に置かれるやうになりました。「青い鳥の巣」はそれから段々有名になつて、やがて此の町に無くてはならぬ誇の一つとなりました。